春来歌句集

へ 5
6507

ハ5
6507

0/0/8602/1695

わが世尊の十大弟子と称せられ給ふの
れそしり給ふも智恵第一孔何神通第一
孔何とうやうの事を孔一ツ〳〵論じ給ふに
徳のれそしり給ふ孔子乃十哲とてかしこき
人〳〵孔門にまします人〳〵徳行を後言語を
雖と已くらゐのひ得ら道の有りさを芭蕉
翁乃孔雖孔門人も乎角を孔句我庵
やうの丈夫を静よ地恢を粧く土芳ありに
新ちをたるしき却り正義を奇と丈考ち
かゝみより事と古来孔論却りしめく已ゝ好る

句作の一をしよりてかゝ条乃うるしに習ひ
得たりとなん　これ芭蕉一人のあらず
出るうくを北白川のかたらふれや世をの
十大弟子孔子門十哲乃きそひるべきなれど
そ北門人多うる中ゝも関東ゝ其角嵐雪
といひつゝ西ゝ去来丈系ゝ雖弟雖之の
上足なれども其角嵐雪を風雅を弘めるを
業としもて名利北境ゝ越へさるを北流れを
汲む業ゝ多くて其角ゝ五元集嵐雪ゝ玄
峰集等ゝいへる家の集ありて世ゝつたふさる

去来丈系ゝ蕉翁北真指北むるゝ弟子
風雅の名利を深くいとひて第一指無微
笑北こゝろをよく傳へて一系の傳書を著さ
一人北門人北なれども北なれども北慶白を
集へき人も無しと北嚢ゝ北蕉翁乃
風雅の筆跡ゝ花ゝ所ゝ出こ人の風
雅を志ひ字嘆嘆無ゝ事の花ゝ逐ひて
を惜ゝ知うき嵐山と吹して彦輝舎ゝ
むうしをゝり栗津の浦北秋の月ゝ入れて
秋の思るゝ東北菴ゝ添て名北生のゝ入れ

家をたてゝうしこまやしき家を里人出こゝろ
書けつゝ名をも農白を久しく元農孔底の
かゝし道しをこ孔古誘嵯峨の重厚衆僧
孔魯江の二位陽白寫人こゝをおもこの内に
こゝかゝ名めるよ尺色しむう寄生や窓の
あへ出していてるよ古人孔心よ皆くるる
ちゝのん

明和い年卯の春こ月東山高峰孔里
五柿庵ゝし蝶夢記

去来雄を白井名を雷の郎年篠馬に把
前出時孔人ゝり彼地の聖也乗源乃
兵族ゝして世ゝ儒を業と生博く書ゝ
ゝ文学等をきゝ名詩歌を歌ふゝ沈
夢ゝ寄ゝ特猪を刺ゝ都ゝおゝ字何
ゝし孔殿下ゝ仕へまる宦徒の時ゝ芭
蕉ゝ義ゝ陪して孔絶の九雅を学ふ鴨川
孔東聖護院村ゝ住ゝ嵯孔小倉山の
麓ゝ別荘をいゝちゝて行通ふ孔秋のころ
庭ゝ柿の高しゝを孔ゝ孔居を高柿舎と

名つく菊亭内府ゑりを扶之字を殞
寛永元年の秋九月十日没を奉る葬
山崎めまよあり今扶桑柿舎を移和
ころ重厚再興して今存せり

去来俳句集

春

元日や家よ流りし太刀常人
元日や土つくふ虎彩もを生
鶯形てを逢しふても花の書
富人の京書ゆさうの伊勢武要
莨菪よりけてかさ法や老の油
家巣や老如よりて松乃陰

月雲はしらめも　まくらし　門の松
猶り霞もうまき　谷の人初子　孤日
やう　菜つみ　麦　孤らうさん　儀
嘆　嘆　ふまてある　曙ふ
春や　祝ふ　丹波の　霞に　傳ふて
夢は　嘆　俳ひ　ふ　底　ふ
うくひす　乃　言つる　ちう　数　二三日
鶯　中　内　の　と　嘆　と　地　う　春ふ
黄　金　沈　ち　く　く　そ　に　楽　春　う　曲
う　く　ひ　す　の　鳥　う　ち　り　言　や　谷　の　衣

春や　雀　ち　り　枝　う　つ　楽
萬　籠　孤　ち　ま　ひ　う　う　鳥　の　音
孤　孤　初　う　春　孤　鳥　ま　ん　と　舟　よ
然　て　出　る　に
う　く　ひ　す　う　人　の　笑　似　る　う　梅　の　清
孤　て　い　る　ま　く　梅　孤　れ　ひ　う　孔
上　金　簡　の　山　春　ま　し　く　う　ふ　千
俵　し　俵　り　て
梅　う　る　や　山　踊　ふ　入　る　尺　の　ま　ま
言　像　や　海　う　う　夢　て　う　る　孤　花

五六なんとうて走る猫の柳の南
庭にて人をまどのせるやちまれ
事務の書いてある遊ぶ板戸うえ
此乃至まえつる人も柳の絵
角ばしまきよ閑のうけくの職自
鉄まえまま事ぬ夜とられて絵あり
流れより北文の返した
鉄自一生つて平ウれう那
弁慶町所とゆうまよ
角をそなえ多川中の高ウり機月

猫出しに来てきうまれ猫の悪
うき友よ。うまれ子猫北せたら老
牛原ヤニ延おれこむ猫のこひ
いくまへう寄形岸北鮭の市
田形酸ヤ紅を貴員をなく鮭
一時をまそ嘯ヤも誰う那
流つぶもひしけと雄まのかろ乳
鏡乃木ういうう人まし北雄
帰るとてあつまる雁よ海のそ
遊ふうも行ともまぬ蓋う鮭

山荏の言葉も別れ乳
拭ふやうや下座より寄る古家の雛
上り帆の淡雪を仏の形平ら
うごくとそ人寄畑の男この南
陽炎や生きるつく度う奪
神鳴や一もう雨のさうくを
寄れに鳴出れり水の形蓋
名丸遍悼
蹴き出蓋 愛も名鍋也遠の俳
よこのを喫

凡十年此笑を三条の鬼を化し
を形泥を百年乃少を生を情
こても移名鍋おしく此一句を
多而て来しうを行を俳を語り
使るのを
寄き名よを寄やを也此生別
花を中つ上り寄るをを寄も乳
函行の剱をうして頼改形徐を
鍋を蹴きも人を形をこを乳
使を寄う馬上鶏形少

伊勢にも初さくら
花ぞ白き形をつき合せ
知る人あはしくも花見ぶり
伊勢の国人乃長刀
咲花のうき世ぶり人や神ぶり
ちる聖山さきちる方よ岩のうり
小袖かな屋ちがうしや宿の花
一ぶりきこの山ぶり花さくの里
花見もうせぬ里のおぶり孝
湖上ぶり花

花よ今眺入り志賀ぶり浦
立枯の湖り多さよ花の中
因上ぶり尾へ花見ぶりて
海を見る目つきも出来ぶり
山沿くぶり入りて
木の宮ぶり天狗も今を花の夜
南都の般若寺にて
数こうぶり花や般若乃参ぶり
数幾も角を鹿ぶり森の花
花見とちるまや湖の向ぶり山

[illegible]の芳野ふうしや文機
つむしろするやはるゝ赤桂
をゝ一文字ゆきぶうるさや鶯の山

居

山家北のとのゆゝを机う南
義の根やあけてゆり出る桑つゝ
[illegible]も喜ようつく茶摘哥

義北分すり拾ひし時る年の
寺義仲寺へ詣る
名塔もゝやさつゝや寺北面

三[illegible]文書のも名紙うゝ
集宝形寺納のを
神風北伝也ゆうし門の仲

夏

鄙ゝ[illegible]やゝ雀と十文字
うゝ出と山ゝ[illegible]る規
先月ゝ影見合やかゝ[illegible]
いかゝ代夜蛍や時鳥

言葉うて逢まゝ海うかゞゝき毛
樣毛の乃や山出し孔郭ゝ
伊勢ゝ孝ゆきのふ一孝ゝ鶯と孝
うゝひもやゝ文方乃や時雨
海ゝ乃の空筆ひゝけゆゝきて
西山ゝ孝ゝ孝ゝて
新芝ゝ世や内地ゝ孝ゝ現
鶯鳴ゝあゝしゝと家所孝り
秋言とゝてゝ
孝孝孔身ゝ孝ゝし孝ゝ世郭と

伊勢ゝて
孔孔花も海のかさりや新熊山
うの家孔孔孔乃孔孔孝ゝ人つ孝の門
巡徳のころ
孔乃花ゝ笠摺ゝ孝ゝ和瀬山
孝ゝり孝ゝ孝ゝ二ツ孔山乃歳ゝり孝
色ゝの他ゝちゝゝ麦孔孝ゝ
つゝゝ孝ゝ孔孔孔孔や麦畑
新ゝの孝孔孝ゝ孝ゝ孝ゝ孝ゝ
毎孝孔一濱留孝ゝ孔花

鶯啼跡ふる雪の人もとはぬ庭の花
元禄七年九月十日
宗波行脚を餞し序
移植小蘭うゑるゝ白しの事
竹のあや篇濤を悪太郎
義士祇園の生涯をいとふて
筆硯の料より走るし方仏作
俳の中さり給る月雨
生ましくに云ふ月物むこ云ふ月
大和紀伊の境さてちし坂もて

法華の順礼を[illegible]
れと移居つゝ[illegible]
てちし坂や五月雨
[illegible]峠まて
五月雨や紀伊路八月田
曲水あるにいきそれて鶯田の蛍
見よ雪の谷より谷へ[illegible]
つゝきて万ぬと鶯れて行舟を
さしてし
[illegible]史や里津祇楷児の峠

蛍火や昼とされて鳴く蛙

蛙なる身やうの家の

夕ぶれ上るよ出しく清るかな流れ

妙札堂や亀治しるる岩ぬ上

鶏もとらく対ふ水鶏なく

石垣よりちぬ咲くやゆ渕の動

尺物の失なれまぬ物ぬ

横寝して多ちき家ぬ敷き乱

木陰へ中のうて

山里ぬ敷き蚤年と鳴ひら

其角北四郎乃悼ま

敷き寝ちて書たく梅ま宮

書寝を敷此ぬ結や八形大原

谷汲寺にまして

頭巾も去ぬや猫ま魏ぬ飯

しけや漆ぬ上乃さとう

主ぬ〻〻今やきれて流ま京

涼しさよ多主ちゆ入口敷

町もしも糸ま水ぬ多きく

文ま教を儒ま乃ふ物流水

猫ぜ子乃中者寄るまくこの孔
紀伊の藤代成通り[illegible]所
之郎重家ぜ来今よりと字乃
ゆれ丈影へ作りしに門築地押廻
伯き馬とうき立さる矢ぜ根立
いとし紀表士ちりき遊よいすへぜ
寄掛れて古木今もあり
藤しぜゆやひしき門ぜ立まこと
流東生ゆめもて美走ぜ来屋敷の
まくしとも壁山よりう伯念佛うあ

少まくこと花まを起しを帰りり
まくくに春孔丈涼しき夕の延
葬乃こ高よりくる暑ぜ那
石も木も船に老る暑りか
夏流の底延城ぜ人見ぜ松まを
くるあつくぜゆや人見乃松ぜ孔
伯ぜへよ人見の松の緑ぜ春
国しを国まて
家うけて美来ぜくを暑ぜ孔
菜ぜくれを立て出て底の暑の素

書まし川や嵯のひうへ北尾の山嶺
夕ゝれ也　元ゝ[illegible]
伏見の舟中より都の方をうゝ見て
乃立乃雲もうゝ[illegible]
六玉川記あり
六玉川　[illegible]
鶯音て夜さめき人土用子
水を月北水のふ[illegible]
[illegible]
むゝ里へ一ツ　畑北姫ゝ[illegible]

矢彩や　名を高しる花北形
酒屋ゝ　[illegible]
門黄も　[illegible]

秋

鶯ちゝふ　[illegible]
ゝち巻ゝ　弱のゝ[illegible]
酒造ゝ　[illegible]
筑前の里　時[illegible]

あくとも沖より出て雨と共に踊し

住るとふを聞きて

七夕をまつてやあらし舟踊

老いらくを途まて漁父北書始の

ふるとふを七月七日のふまて住りける

星祭砂明神まて

うちつける星まつり影や浦北台

魯町ヶ許まる

山本や鶏入り来所星むこ

蕎麦の裏ちつうしや歌の瀬

書よおれる人北許まて

森道角乃うしやうかい蕎麦

角弾ともなほ帰りにに

尺こ人も孫子ちりて蕎麦

頭子よ望き畑乃高めこの人

敷新や秋き庫北特美台

秋の日北かりそめるのうれ孔りう

新酒や特の以芝北起上り

寒蕎麦と風こそゆき末法業

悼風国

胡夕よりふるさとふり捨て袖の露

嵐蘭追悼

手賀沼に剣うめりし芦の露

遊女書盤なきのうるをうらみて

相しらぬ人をまつ待る

露ふるく世世の名残身に

芭蕉翁に奥の細道を餞し

その時画写の奥に書付侍

ゆかしつ千つ捨やつもりて袖に露

餞書のうきせを行間夜に

出崎丸山まで

いなつまやと孤城空うり状

都に伯まりまりまりとり

澄芽生やまりを下き色の春

又船かもや人をとむる山に月

田上にて

山宗に魚肴ふ上に早稲のめし

うけ椀に松おりと抱つく西瓜の乳

風梅に馬飛まる乳花まき

ひとと山まで卯せ別とて

君うるもしるべし花見先
岩清水 ひとり月に家
育うり 唖れかハゆき月見の
名月や 猿うりすき桑のう
名月十海も れりたる山もうに
月見せん 伏見の城に珍 新
名月や むうひに 掃部殿さま
集寺の ハる 寺にせて月見の孔
思い月 まいこも 掃乃月見う赤
蘆くも 赤 向うん 月に孔

猫に変よゆく方や時に月
清水かハ化して初めしよ休
息仕ん孔を
月にこよひ我里人乃 業うん
世界 みくちうの日孔に
長崎より京に帰りて
鶴 川や 月見の家より出うう
長崎 赤行事
浦人を 掃ちて 海うる月 掃う面
長崎より四よ 掃除うつくうう付

名月やさの方にせまる格子戸

園木は花をすてゝ姫はぎ

くゝふを簡子

月うつるゝ裾を深さよゝゝは秋

中秋の空形ゝを送葬して

うゝゝ夜は月もつゝゝ

也時諏訪の社すて前書号

雪とさゝを京てうゝゝも紙衾の月

十六夜やもしうるゝ雲孔色

弱柴の不動や出ゝ人ゝゝの

海山を見て後は月尺ゝの

宰春年納

第秋は白色も神乃光ゝ

一戸や古も中ゝゝ弱むゝ

京掛の城をさやきゝゝ

指ゝゝ嫁ゝゝ花　姑ゝ姉

あゝ風やゝゝ不の弓ゝ強ゝ

秋風ゝ耳の垢ゝゝゝゝ

吉備津宮奉納

秋ゝの七夕や鬼ゝゝひしゝ吉備の山

湯所のやゝ小森よりゑ廣北角
小男廣や岩ゑ踏たる雲の雲或
峠廣ゑを推の木枝ゑ人付ゑ
枝おしや雲ゑ吹ゑ原茅のこへ
れく山や五寸つく〳〵廣北寸
伊部岐急ゑて
ゑ川澄ゑ岩ゑ立や廣の聲
浦陰や通しゑ寸ゑ
新おしゑ雲の上ば渡ゑ
ゑ北ゑ乗業ゑ上ゑ

道あ雲北廣ゑを通ゑ
人くゝへゑれも知ゑいそき
せゑれとのゑれゑる晩ゑ枝北ゑ
書ゑ先待ゑ
ゑふ望ゑ来ゑいそうしゑゑ鳥
長崎ゑ桜森のころ
ゑゑさ雲も今ゑうゑ森や渡ゑ
雁うゑの筆ゑゑ時形ゑし
筑前北玉ゑ
福長や子賀ゑあゑは原ゑ紀

同月廿六日

なを生をふてわすれぬ海藻女や鮑つり

先伯を行く北浦を訪ふ

八月廿日　潮のさゐきを山うつる

田家

南方とふう栗山子乃職力

青磯海藻擬珍ひろる時八月

名書かつ色をせるに係て

旅をそ

警北堂や聖子の物とる有磯海

松茸やしめしめとうく　北先

老て神職ふむうる人を賀て

亀も寒も　繁稽こをし　神の秋

経波津を

芦孤鶴を著るゆうるやの猪

雲母　雲母をて先伯北をとも中

出るる岸の

秋をかの日をさつ菊の蒼うれ

葉咲　文孤　把のかさりや　山畑

筑前特あをて

第五段 多くよりかれて森たや濱底

自題 為柿舍

柿ぬしや 梢きちの身あらし山

唐柿舍感偶

柿實や 又れてぬいる 苦素麦

芽立より 二葉よ志る 柿の實と

丈多ゝきれしもいの 北ゆるや 有

久人彼 為柿舍もちこちつし

恋うて 安る 柿北 西葉も 森間の孫

也 清うて 支考よ 遠を 京北 ゆ

きを 毎つゝ られて

息方北 義よ 問まん 嗟咏の 柿

木北 ゆゝふ 為 味ゝ ゆけ 木孫し

南坊よて

法山乃 夢麦 白ゝ人や 孫を 姫ノ

唐人北 北ゝて 為てゝて 人北

ゝれ ゝる ゝ

嗟へゝを 中川 史 北を ゝゝ 北

蘭北 說 蘭も

西枝 持を へつゝ 栗北 蘭も

續甲陽軍鑑

おもゝ菊まこと信濃の義士なりや

也き夜も猶多以て寒くれなり

聖復院すて

撰ぶ所の色もさまるや秋ぶ室

うき人をまさに後るゝ菊の花

菊

菊ぶ孤もかゝるなる紅しる絶

うもゝゆぶ鳥帽子の上や初時雨

振ものゝ寒き紅しる

いそうしやゆぶ時雨乃岩帆

一村雨しる

てうしぶ地も寒さなしる雨

ちゝゝやぶ小袖を吹うへし

雲ゝりも先ゝ時雨う鶏

山雀の里この寒さ寒ゝ

響雨乃上ちちやくしる小

倉村ぶ時雨う寒

翁に病ふを聞くに仕丸より
おくれ毎さしつかはす
舟よりおくる魚物に河や魚籠
翁の病中
白鼠のあすかりまゐらせ侍やぬかとより
貴病も一人前に火燈の番
玉泉中や火燈添て月に新
翁の病中に猪に白
未のうしの刻京尺夏毛鶴のこゑ
傷に師に事

中略れば室も十夜に泥うち
去る年の許すり芭蕉翁乃七ちく
ちくりあそれさに名庵み
偶居して地さへまきすて
新雪や茅屋の後に葉鍋と
なるこのくし
朝雪や人参つ人て蕎麦に
翁を田屋忘る義仲まるす
蕎うつてを度を猫に乳乳
りうつて蕎麦に蛙み猪

木曾情を乗りて
能馬ゆゑ注連七神多内
於宮ゆ
和泉や四五里ばかりにて比良坂
應くとらへと先くくや雲の門
世尾より雲につるるや小野坂岩
雲に山かくさ猪もちのり乃
九重ゆ尺ちれぬ雲の高さうれ
御ゆる墨のとろや比良乃雲
旅人乃和も通ゆ雲に移

強に中に居て見る雲の山ゆ乃雲
雪堂や鬼も猪を出さへう
時浮化君
そに対や京ゆ長崎地逢の雲
嘆簾や比叡雲ゆ見ぬ時ゆ猪能町
軍畫を讀て
雲偉れそ事盤に前に家勝
ひつゝみて山やて雲次の豊崎廉
於移ゆ出ゆ上ゆ乃ゆ少
志我者と指やゆれ人も者れ

新僧正

馬道や蕨をたゞて霧北面

山畑や喜このくして冬のかゝ

雲海より眉北色長し冬籠

西七竜

霧自やヨ日やせる去りく冬こゝろ

雪南へるへし

筋をゝと問るゝ家や冬霧

貧硯俊山撰集

木ゝしや剣きぬるふとゝぎす山

夕暮るひゝつく孫北の乳霧ぶ

冬ゝの乳のお北向歌人喜毛夫

賽銭を高くして拝ふ高宗北

市ゝを見て淋しき新や神送ゝ

荒磯や蛸もして引きたゝる

鶏なくや方矢を捨て十五夕

尾形北 ゝとなきを海氣ゝ乳

ゝ北古き霊宮乳也よ新ゝく

物ゝゝく門ゝを立き鉢さゝ北

雪寺也 先物てゝ乳也ゝ銭設

十錢と拾ひて百姓の家を借りて
旅人の宿きたなし 紙おくき
情の火よ 新る 冬さき 住居の
懐僧よ子
冬き夜や男ひつ〻ふる 山形上
堀川を通りて
有明よふり向くさき空さの雷
火ともし色 少 背戸に寒し 竈の前
李下うき寒 北方中ふる
森〻まぬ 秋 ゆく〻 波 ゆく 北下し

冬人よおひ〻いと人 鶏 北 紙
屋 弟 桑 ゆ 火を 梯 く 宿 ち
心 楽 北 ゐ と 言 し 伴 佛 名
度 澤
北 北 面 雨 き の 彫 る 地 書 岩 山
陳 風 ふ 乃 撰 集 を 祝 ひ 蓑 句
氣 せ 人 と 花 ゆ ふ に 書 む 〻 ろ
〻 〻 北 北 苔 栗 き す て 識 出 し ろ
北 ち と 人 の ち 孔 と こ の ろ 〻 き 冬
冬 ち ろ へ と 海 法 し 待 り で

家鹿は一孔寅や書むしろ
ゑて行く年のまうきや伊勢慈地
行く年小夏孔砂や尾の形
うき鹿孔一章きゆらとし孔船
やうもと兵牛孔尾ぢと孔角ゆう小
神嶋もきいくや年の家孔書
也清孔浦ゑ拔蔵して
家浦乃ふゆて川や生孔下
とし孔夜の鯛や鯨やこの腰
年の歌やゑ人ゑ生孔十むゑ

追加

高砂和歌浦に藤ひさかる糸されこ
十五夜の月孔ひきれ前ゆろ
口形ゑゆ嶋きちの月の書
牛妻て伯又と生ほ孔小